The Young Women's Christian Association
YWCA

〈第33総会期主題聖句〉
平和を実現する人々は幸いである
―マタイによる福音書5章9節―

〈ビジョン〉
女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

〈ミッション〉
若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉
キリスト教基盤　平和・環境　人権　セーフスペース

6
JUNE
2021
No.762

www.ywca.or.jp

特集 **同じ日本に生きる**

2～5面　寄稿・安田菜津紀（フォトジャーナリスト）
「難民鎖国」日本のリアル
6～7面　沖縄からのメッセージ

耳を澄まして目を向けて

潮が引いた辺野古の海岸
写真／金井創

同じ日本に生きているのに、となりで助けを求めているのに、
社会の大きな声にかき消されて、多くの人は気づいていない。
でも、確かにここにいる。いまここに、私たちの問題がある。
6月20日「世界難民の日」、23日「沖縄慰霊の日」を覚えて、
今号では2つの問題を取り上げました。

難民はこの国で「負担」なのですか

フォトジャーナリスト
安田菜津紀

言葉に詰まる「難民鎖国」の現実

2011年から戦争が続く中東の国、シリア。

私はこれまで、戦火で家を追われ、シリア国内で避難生活を送る人々、隣国に難民として逃れた方々の取材を続けてきました。

テントやプレハブが並ぶ、小雪のちらつく難民キャンプに暮らす人々もいれば、都市部の小さなアパートでひっそりと身をひそめるように生きる人たちもいます。こうした困難な状況を抱えた人々から、「日本に連れて行ってほしい」と声をかけられたのは、一度や二度ではありませんでした。

「せめて子どもだけでも」と親たちに懇願されたとき、なんと言葉を返していいのか、分からなくなってしまうことがあります。日本で難民として生きることが、いかに厳しい道のりかを目の当たりにしてきたからです。

日本での難民認定率の低さは、かねてから指摘されてきたことですが、2020年に認定されたのは47人、その前年は44人で、難民認定率はわずか0・4%という「難民鎖国」状態が続いています。

移民、難民に厳しい発言を繰り返してきた米国のトランプ政権下でさえ、難民認定率は30%近くあったことを考えると、世界との差は歴然としています。

さらに、日本にたどり着き、空港で難民申請をした人々や、観光ビザなどで入国して「このまま日本に残らなければ命が危ない」と、日本に滞在できる期間を超えて留まっている人たちは、「正式な在留資格がない」ことを理由に出身国への退去命令を受け、「入管（出入国在留管理庁）」の収容施設に収容されたり、そこに何年も閉じ込められたりすることがあります。

「せめて子どもだけでも日本に連れて行ってほしい」と、わずかな望みを必死につなごうとするシリアの人々に対し、このような日本の現実を突きつけることは憚られ、いつも返す言葉に詰まってしまうのです。

シリアの国内避難民キャンプで暮らすメイサちゃん（12歳）と妹のアシナーンちゃん（2カ月）（2019年12月）

©Natsuki Yasuda / Dialogue for People

保護の必要があるか判断する「入管」

「入管」とは、人々がルールを守って日本を出入りしているか、不法に滞在している人がいないかを管理する法務省の機関です。こうして不正を取り締まることで、日本の安全を守る役割を果たしてきました。

ただ、「日本から出ていかなければならない人である」と判断することと、「保護が必要な人々かどうか」判断をすることは役割が違います。けれども今は、この二つの決定を、どちらも入管が行っているため、それが難民認定率の低さにもつながってきたのです。

「この人は危険から守らなければならない」と判断する難民認定には、他の組織の視点も必要ではないかということが、指摘をされています。

難民に関わる法律に危うい動きも

そして今、出入国管理や難民認定に関わる「入管法（出入国管理及び難民認定法）」が、大きく変えられようとしています。

2021年2月19日に閣議決定され、国会に提出された「※入管法改正法案」は、すでに人道上、多くの問題点が指摘されています。

この法案では、国外退去の命令に従わない場合、1年間の懲役、または20万円以下の罰金となる可能性があります。けれどそもそも、退去強制令書が出された人々の9割以上は、送還に応じています。それでも帰国することができない人々は、「命の危険がある」という難民に該当する人々や、「家族が日本にいる」「生活の基盤の全てが日本にある」など、帰れない事情を抱える人たちです。

加えて問題視されているのは、法務省が難民と認めない決定を2回下せば、以降は強制送還が可能になる仕組みです。つまり、何らかの事情を抱え3回以上難民申請をしている外国人が、迫害の恐れのある国に帰されてしまう可能性があるのです。

※出入国管理及び難民認定法及び日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法の一部を改正する法律案

生きるために声を上げた

2021年4月7日、この法案の廃案を求め、弁護士、支援団体、難民申請をしている当事者、賛同する著名人らが記者会見を開き、人道上の問題を改めて訴えました。

・エリザベスさん

この日、会場で声を上げた3人の難民申請者のうち、ナイジェリア出身のエリザベスさんは、FGM（女性性器切除）の危険などから故郷を逃れ、すでに日本で25年以上暮らしています。彼女は「仮放免」という立場で生活を続けています。

「仮放免」とは、在留資格がないなどの事情を抱える外国人を、入管施設に収容するのではなく、その外での生活を認めたものですが、労働許可を得ることはできず、健康保険にも加入することができません。支援者からの支えを頼りに暮らしをつないできました。

そんな不安定な立場でありながら、収容者との面会を続け、彼女たちを励まし続けています。

「本当に本当に、心が痛い」

会見の冒頭でエリザベスさんは、自身のことではなく、収容されている人々の体調不良や経済的な窮状を訴えました。

「仮放免の人は何もできない。仕事できない。自由に移動もできない。難民の人たちにも家族や子どもたちがいることを忘れないで下さい。本当に本当に、心が痛い」

法案に対しては、次のように語りました。

「今日苦しい思いをしているのは難民の人たちかもしれませんが、明日は日本の人たちだって苦しい目にあうかもしれないんです。今日のことだけを考えてやり方を考えないでほしい」

エリザベスさん ©Natsuki Yasuda / Dialogue for People

・デニズさん

トルコ国籍のクルド人であるデニズさんは、迫害を逃れ、2007年に来日しました。

これまで複数回難民申請をしており、現在も申請中です。2019年、収容されていた「東日本入国管理センター」の職員から激しい暴行を受けたことで、現在、国家賠償訴訟を起こしています。解放された今もPTSDに苦しみ、この会見の前日に退院したばかりでした。

デニズさん ©Natsuki Yasuda / Dialogue for People

デニズさんもエリザベスさんと同じく「仮放免」の立場で、健康保険にも入ることができないことから、高額の医療費がのしかかっています。体調が万全になったことで退院したのではなく、入院し続けるのが資金的に厳しかったことを明かしました。

「私たちは人間です」

2020年、国連人権理事会の「恣意的拘禁作業部会」が、デニズさん他1名の申立てを受け、日本の入管当局の対応を「国際人権規約に反する」とした見解をまとめましたが、政府は状況を改善することなく、この見解に背を向け続けています。

デニズさんは声を震わせながら訴えました。

「日本ではクルド人は難民として認められていませんが、アメリカやドイツ、イギリスなど海外では、多くの人たちが認められています。私たちは人間です。日本の政府は、国連の言うことをしっかり聞いてほしい」

UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）による2018年の統計によると、世界におけるトルコ国籍者の難民認定率は45・6％に及ぶものの、

日本で認定されたケースは「ゼロ」です。

2005年には、UNHCRにより「マンデート難民」*とされたトルコ出身クルド人たちが、日本から強制送還されるという、非人道的な措置が講じられたことさえありました。

※UNHCRの権限で難民と認定された人

・ラパイさん

ミャンマー出身のカチン族であるラパイさんの父親は、反政府武装組織であるKIA（カチン独立軍）の将校です。ラパイさんは12年前に日本に逃れ、現在3度目の難民申請中です。ミャンマーでは、2月に起きたクーデター以降、軍による市民の殺害が相次いでいますが、カチン族に対する迫害は、それ以前から報告されています。

「日本から送り返されれば、ミャンマーに帰って死んでしまうことになります。本当に命が危ないから難民申請しているのであって、日本に遊びにきたのではありません。それでも受け入れられないから、何回も申請するしかないんです。私たちは人間ですよ。命の心配をしないで暮らしたいだけなんです」

この3年ほどで、ミャンマー出身の難民申請者は約2000人いましたが、認定を受けた人はいません。

振り絞る声に応えるのは私たち

デニズさんもラパイさんも「私たちは人間ですよ」と語ったように、これまで日本国内で取材をさせてもらってきた難民の方々からは、幾度も「私たちは動物ではありません」という声が上がってきました。

難民に門戸を閉ざし、収容施設に上限なく閉じ込め、密室で暴力さえ受ける環境は、シリアで出会った人々が抱く、「平和な国、日本」というイメージからかけ離れています。

平和とは、単に空から爆弾が降ってこない、過激派勢力が街に攻め込んでくることがない、という物理的な安全だけを指すものではないはずです。どんなバックグラウンドの人であっても、守られるべき人権がある、という当たり前の前提が抜け落ちてしまっている今の状態は、「平和」とは呼べないはずです。

延期となった東京五輪を、今年開催の方向で政府は動き続けています。大会では、紛争などで母国を離れた難民で結成する「難民選手団」を受け入れることが声高に掲げられています。もちろん、選手それぞれが大会に向けて重ねてきた努力は、否定されるものではないでしょう。けれどもその足元では、外国人に対する人権蹂躙を繰り返しているのです。五輪という舞台でのみ「難民受入」を誇るその姿勢は、あまりに矛盾するものではないでしょうか。

公権力や公的機関から理不尽に尊厳を傷つけられてきた人々にとって、メディアの前に立ち、記者会見で声を上げることは、並々ならぬ勇気のいることだったはずです。彼ら彼女たちが「声を上げてよかった」と思えるような仕組みを築いていけるかは、私たちにかかっています。

追記

5月18日、与党は今国会での入管法改定案の成立を見送る方針を固めました。秋以降の国会の動向などを、引き続き注視していきます。

NPO法人Dialogue for People

安田菜津紀さんが副代表を務めるメディアNPO。写真、文章、動画などさまざまな表現で社会の課題を「伝える」活動を展開。今、遠くで起きている誰かの問題を、一人ひとりが「自分事」として捉えて、共に生きていくための「対話」を生み出すきっかけを提供している。難民問題のほかにも、沖縄の基地やジェンダーの課題など、安田さんが手掛けた取材記事や動画が多数掲載。

公式サイト　https://d4p.world/

profile

やすだ　なつき

1987年、神奈川県生まれ。16歳で「NPO国境なき子どもたち」の友情のレポーターとしてカンボジアを取材、上智大学在学中にフォトジャーナリストを志す。現在は東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民、貧困、災害など社会問題を取材。東日本大震災以降、陸前高田市を中心に被災地を継続的に記録。常に弱者に寄り添い、声なき声を伝えている。TBSテレビ『サンデーモーニング』にコメンテーターとして出演中。著書に『君とまた、あの場所へ　シリア難民の明日』（ポプラ社）など多数。NPO法人「Dialogue for People」所属。

©Dialogue for People

沖縄からのメッセージ

遠い場所にいるキミに今、知ってほしいこと

日本キリスト教団佐敷教会牧師
金井　創

数字を見ても実感しにくいけれど

最近知った興味深い数字があります。それは「基地密度」というものです。

沖縄に米軍基地が集中していることはさまざまな数字で示されてきました。最もよく使われるのは、国土面積が日本全体の0・6％しかない沖縄に日本全国の米軍専用施設（米軍基地）の70％が集中している、という数字でしょう。これを見てひどいと思うか、ピンとこない実感がわかないなど、受け止め方はさまざまだと思います。数字を実感に結びつけるには自分の目で確かめるか、想像力をいっぱいに働かせることが必要になります。

「基地密度」はこの70％という数字以上に実感に近づくことのできる数字だと思います。沖縄の基地負担が過重であることを示すために、同じ面積の上にどれだけの基地があるかを示すのが「基地密度」です。

「基地密度」は本土の４００倍！

日本の国土面積と沖縄の面積を比べ、沖縄の米軍専用施設と一時使用施設を合わせると沖縄の基地密度は県外の39倍になります。米軍専用施設だけで計算すると３８９倍。それぞれ切りのいい数字で約40倍、４００倍とおおまかに考えてもいいと思います。どうでしょうか？　この数字にどんなことを考えるでしょうか。沖縄の米軍基地密度は内地（本土）の４００倍。このように覚えてください。

ですから沖縄では米軍が訓練をすれば、それはただちに人が住む環境に影響を及ぼします。その米軍訓練は特にこの1～2年激しさを増しています。宜野湾市の真ん中にある普天間基地ではヘリコプター、オスプレイだけでなく大型ジェット機、戦闘機の離着陸訓練もひんぱんになされ、激しい爆音をまき散らしています。私が暮らす南城市は軍用機が滅多に飛ばない地域でした。かつては年に数回程度でしたが、今では週に何度も飛んできます。日中だけではなく夜もです。

豊かな森を壊して青い海を埋め立て

このように米軍基地があるゆえに、日常的に生活が脅かされているうえに、２０１４年からは北部東海岸に位置する辺野古の海を埋め立てて新たな基地建設が進んでいます。

沖縄の自然の豊かさは、そこに生きる多くの命の生物多様性にあります。たとえば北部の森は生物多様性において本土の50倍、海は60倍です。これほどの多様な生き物が本土と比べるとても小さな地域に生息しているのです。ですから、その一部を破壊したり、汚染したりすると全体に大きな悪影響を及ぼしてしまいます。埋め立ては、そこに生きる命を土砂で覆ってしまう「命の生き埋め」です。それが沖縄でいま進められていることです。しかも県民

写真／金井　創

米軍の水陸両用装甲車（上）市街地の真ん中にある普天間基地（下）

本土に住む多くの人が「沖縄が好き」という

投票で7割の反対があったにもかかわらず、工事は止まりません。

今も土中に眠る沖縄戦犠牲者の遺骨

埋め立て用の土砂は現在、北部の鉱山から採取していますが、これが沖縄全域に広げられようとしています。胸が痛むのは採取地域に南部も含まれていることです。かつて沖縄戦では住民を巻き込んだ地上戦によって多くの命が犠牲になりました。その数は20万人を超えています。当時の沖縄県民の4人に1人が亡くなったという悲劇です。沖縄では身内、親族に沖縄戦犠牲者がいない人はないというくらいに悲惨な戦争でした。

その犠牲者が最も集中しているのが南部です。今なお遺骨が発掘されるのです。それは住民だけではありません。日本兵として全国から集められた若者たち、敵として闘った米軍兵士たち、こうした多くの人々の遺骨が今なお土中に眠っているのが南部です。

政府はこの南部からも基地建設の埋め立て用土砂を採取する計画です。特に南部の糸満市の土砂採取候補地は政府が保護し、沖縄県が管理する沖縄戦跡国定公園内に位置し、土砂が採取された場合、戦没者の遺骨がうずもれた土台の上に新基地を建設することになります。政府がするべきことはこの地を慰霊追悼の場として保全し、丁寧に遺骨を収集し戦争の悲惨さを伝えていく場にすることです。

政治的な問題でなく、命の問題なのです

私はこの基地建設に反対し、現場で抗議する活動に取り組んできました。特に船長として海上での行動を続けてきました。豊かな自然を破壊して作られるものは、これまた命を奪う軍事基地です。米軍は沖縄の基地からベトナムへ、アフガニスタンへ、中東へ出撃してきました。

そして今また、戦争の道具である新たな基地が作られようとしています。このことに無関心、無言でいることは「賛成」を意味します。私にとって基地建設に反対することは政治の問題ではありません。命の問題です。誰も死んでほしくない。誰も殺されてほしくない。だから戦争につながるものに反対するのです。

profile

●金井　創（かない　はじめ）

1954年、北海道生まれ。
早稲田大学卒業、東京神学大学大学院修士課程修了。日本キリスト教団富士見町教会副牧師、明治学院チャプレンを経て、2006年より現職。抗議船を自ら繰り、辺野古新基地建設抗議の海上行動を続けている。著書に『沖縄・辺野古の抗議船「不屈」からの便り』（みなも書房）など。

エンパワーするNGO

YWCA

ご協力ありがとうございます

賛助費
国中正人

ピースメーカーズ募金
（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）
田中蘭子　山本容子
東洋英和女学院中学部・高等部
宗教委員会
公益財団法人名古屋ＹＷＣＡ

（熊本豪雨災害被災者支援募金）
公益財団法人京都ＹＷＣＡ

（国内外の災害被災者支援）
日本キリスト教会多摩ニュータウン永山教会　オリーブの会
日本キリスト教団佐世保教会
日本キリスト教団市川三本松教会

東日本大震災被災者支援募金
清水嶋洋子　田中蘭子
中峠由里　塗芙紗子
ＴｈｅＭｅｒｒｙＦｏｕｒ　コンサート
日本基督教団代々木上原教会
日本基督教団美唄教会　教会学校
学校法人東洋英和女学院　宗教教育委員会
東洋英和女学院中学部・高等部
母の会
関東学院中学校高等学校
捜真女学校　奉仕委員会
東京ＹＷＣＡまきば保育園
長崎ＹＷＣＡ

（カーロサポーターズ募金）
織田光恵　柏木妙子
宗教法人在日本南プレスビテリアンミッション
〈カーロサポーターズ　自動引き落とし〉
會津昭代　赤川恵子　赤澤ヒロ子
足立千恵子　石山千賀子
糸洲のぶ子　稲葉和寿子
岩城紀代子　江崎啓子
遠藤眞理　太田尚子　大野綾子
貝塚好子　片山淳子　鬼頭裕子
清塚典子　黒沼百合子　小酒井藍子
小宮一子　金剛静慧　近藤恭子
齋藤知子　雀部真理　佐藤恵津子
篠田あかね　島崎真奈美　清水幸江
髙橋昌子　谷合公江　俵恭子
千葉仁子　辻川さとみ　津戸眞弓
鶴崎祥子　手島千景　中島睦
中村紀子　中山美津江　長澤幸江
西田悦子　西本玲子　根本博子
野崎斐子　野田雅子　芳賀美江
橋本智香子　花盛静子　半澤敦子
東平瑞江　久宗百合子　藤谷佐斗子
藤原玲子　松村真理子　松本光子
丸山泉　実生律子　宮治陽子
山本千鶴　横川宏美　吉田亜希
吉田暁美　吉田夏子

（２０２１年２月16日～４月15日
敬称略）

黙っていることは認めること
日本YWCAは声を上げ続けます！

難民認定に公正な手続きがなされる制度を求めます！
https://www.ywca.or.jp/pdf/2021/0316.pdf

戦没者の遺骨を軍事基地の建設に使わないでください！
https://www.ywca.or.jp/pdf/2021/0305.pdf

小さな声にこそ、社会を変えるチカラがあると信じています。

2020年度　寄付報告

2020年4月1日～2021年3月31日

活動へのご賛同、ありがとうございます。

- 日本YWCA賛助費 …… 1,575,000円
- ピースメーカーズ募金 …… 1,894,239円
  （平和を創りだす女性のリーダーシップ養成）
- 東日本大震災被災者支援募金 …… 3,035,128円
  （うちカーロふくしまサポーター……737,000円）
- 災害時支援募金 …… 5,344,116円
  （パレスチナ支援、熊本豪雨災害／海外緊急支援含む）
- オリーブの木キャンペーン募金 …… 647,000円
- 日本YWCA指導者養成寄付金 …… 310,000円

【　2021年度もよろしくお願いいたします　】

※当法人へのご寄付は、税額控除の対象となります。
※メールまたは振替用紙通信欄で次の情報をお知らせください。領収書を発行します。
①振込日　②金額　③お名前　④ご住所　⑤寄付項目
⑥お名前のアルファベット（オリーブの木キャンペーンへのご寄付のみ）
※ご希望の寄付項目を必ずご指定ください。　※年間3,000円以上のご寄付で、機関紙を発送いたします。

銀行への振込

振込先　三井住友銀行　飯田橋支店　普通預金　1198743
（口座名義）公益財団法人日本 YWCA　コウエキザイダンホウジンニホンワイダブリューシーエー

郵便振替　00170-7-23723（加入者名）公益財団法人日本 YWCA
他行からの振込　ゆうちょ銀行　〇一九支店（ゼロイチキュウ）
当座預金　23723
（口座名義）公益財団法人日本 YWCA　ザイ）ニイホンワイダブリューシーエー

発行所 公益財団法人日本YWCA　〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11　東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121　Fax.03・3292・6122　office-japan@ywca.or.jp　www.ywca.or.jp
編集発行人 実生律子／偶数月1日発行

旬な情報発信しています　メルマガ登録　y-net@ywca.or.jp　にお名前を送ってください ／ フェイスブック　www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。